

『岩倉使節団パネル展』 開催にあたって

江戸時代末期、徳川幕府はフランスと友好関係を結んでいました。一方薩摩や長州はイギリスと深いつながりがありました。

しかし明治期になり、日本国政府は、富国強兵、文明開化をはじめ諸制度の師をドイツに求めたのです。

その裏に一体何があったのか、興味を持った私達は、その要因を探る勉強を始めました。その結果、私達は、明治 4 年 11 月から 2 年間弱、米欧を視察した岩倉使節団の影響が大きいのではないか、との結論に至りました。

使節団がドイツの地に足を踏み入れたのが明治 6（1873）年 3 月であり、今年がその 140 周年記念の節目の年にあたります。

そこで今回改めて、19 枚のパネルにその節目節目を整理し、皆様に提示する次第です。

ごゆっくりご覧いただければ幸いです。

平成 25 年 5 月

ぐんま日独協会 会長 鈴木克彬

1. 特命全権大使米欧回覧実記

明治4(1871)年から
約1年9ヶ月にわたった
岩倉遣外使節団46名一
行の足跡を克明に記録
したものが『特命全権大
使米欧回覧実記』(以下
『実記』)です。それは
5冊組で全100巻に



『特命全権大使米欧回覧実記』原本
(久米美術館ご提供)

及ぶ大作であり大使随員久米邦武が著しました。

久米邦武は肥前の国に生まれ、佐賀藩校弘道館を経て江戸の昌平坂学問所で学び、その後、明治政府に出仕し岩倉使節団に参加する機会を得ました。

私たちはこの『実記』をベースに、明治政府がドイツを手本に日本の方向性を決定した過程を検証しました。そこには、混迷を深める現代社会においても何らかの示唆が暗示されていると思われます。なお、1982(昭和57)年開館の久米美術館には、久米邦武と息子の洋画家久米桂一郎の業績が常時展示されています。

2. 幕末の遣外使節団と留学生一覧

	派遣元	行き先	期間	目的	正使	人数	主な随行者(赤字:岩倉使節団参加者)
使節団	幕府	米	1860年2月～11月	条約の批准交換(交渉権と決定権が付与された)	シンミ マサオキ 新見正興	77	オグリ タダマサ タテシオノジロウ ナガノ ケイジロウ 小栗忠順、立石斧次郎(長野桂次郎)
			1860年2月～6月	使節団の海路警固	キムラ ヨシタケ 木村善毅		カツ リンタロウ ナカハマンジロウ フクザワ ユキチ カンリシマル 勝麟太郎、中浜万次郎、福沢諭吉(咸臨丸にて)
	幕府	欧	1862年1月～1863年1月	開港(新潟・兵庫)開市(東京・大阪)延長交渉	タケノウチスノリ 竹内保徳	36	フクザワ ユキチ フクチ ゲンイチロウ マツキ コウアン テラシマムネノリ 福沢諭吉、福地源一郎、松木弘安(寺島宗則)
	幕府	仏	1864年2月～1864年8月	横浜永久鎖港交渉	イケダ ナガオキ 池田長発	34	田辺太一
	幕府	英仏	1865年6月～1866年3月	陸軍教官招聘、改鑄のための機械購入	シバタ タケナカ 柴田剛中	10	フクチ ゲンイチロウ 福地源一郎
	薩摩藩	仏	1866年3月～1867年10月	パリ万博出展	イワシタマサヒラ 岩下方平	12	
	幕府	露	1866年11月～1867年6月	国境の画定交渉	コイデ ヒデミ 小出秀美	19	
	幕府	米	1867年2月～1867年7月	軍艦購入	オノ トモゴロウ 小野友五郎	11	フクザワ ユキチ 福沢諭吉
	幕府	仏	1867年2月～1868年12月	パリ万博	トクガワ アキタケ 徳川昭武	31	シブサウェイイチ タナベ タイチ 渋沢栄一、田辺太一
主な留学生	佐賀藩	欧	1867年4月～1868年6月	パリ万博・オランダへの軍艦建造発注・兵制視察	サノ ツネタミ 佐野常民	5	
	幕府	蘭	1862年7月～1869年1月	軍艦建造と様々な知識の吸収		15	エノモト カマジロウ エノモト タケアキ ニシシュウケ ニシダマネ 榎本金次郎(榎本武揚)、西周助(西周)
	長州藩	英	1862年6月～1868年12月	軍事技術の習得		5	シジ モンタ イノウエカオル イトウ シュンスケイトウ ヒロブミ 志道聞多(井上馨)、伊藤俊輔(伊藤博文)
	薩摩藩	英	1865年4月～1868年6月	軍事力強化(陸海軍学術習得)		15	モリアリノリ テラシマムネノリ 森有礼、寺島宗則
	佐賀藩	英	1865年11月～1868年3月	海軍の学習		3	
	幕府	露	1865年9月～1868年10月	地理・物理・法律・器械学・海軍学等習得		6	
	薩摩藩	米	1866年4月～1868年10月	海軍学・農政学・政治学・法律学などの習得		8	
	幕府	英	1866年12月～1868年5月	海軍学・化学・医学などの修得		14	カワジ カンドウ トリシマ ハヤシタダス 川路寛堂(取締)、林董
	幕府	仏	1867年9月～1868年12月		トクガワ アキタケ 徳川昭武	17	
福岡藩	米		1867年8月～1874年8月	法律学・土文学などの習得		6	

江戸幕府最初の海外使節団である新見遣米使節団は、米国で大歓迎を受けた。この使節団の実質的交渉責任者であった小栗上野介忠順は、貨幣交換比率確定交渉において、「ノーと言った最初の日本人」として名をはせ、アメリカ人に強烈な印象を与えた。ワシントン海軍造船所の視察や欧州各国での視察を、帰国後の横須賀造船所建設や日本最初の株式会社設立などにつなげた。

この日本近代化への努力や構想は明治政府に受け継がれた。また、幕府や藩の使節団経験者・留学経験者の一部は岩倉使節団に参加し、その能力と経験を生かした。

3. 岩倉使節団派遣の目的と使命



左から 木戸孝允、山口尚芳、岩倉具視、伊藤博文、大久保利通
1872 年 1 月 23 日サンフランシスコにて(大久保利泰氏所蔵)

日本を開国に導いた 1858 年（安政 5 年）のいわゆる「安政五カ国条約」は領事裁判権・関税自主権放棄・最恵国待遇など、日本にとって不利な不平等条約であった。日本が欧米の植民地とならないようにするためには、欧米列強と肩を並べる必要があり、そのために明治政府は先進国の制度・文物を調査研究して近代化しなければならないと考えた。そこで、お雇い外国人の一人であるフルベッキの進言を基に制度・法律・理財会計・国民教育・陸海軍などを調査・研究するために米欧各国を訪問することとした。

4. 岩倉使節団の規模と内訳

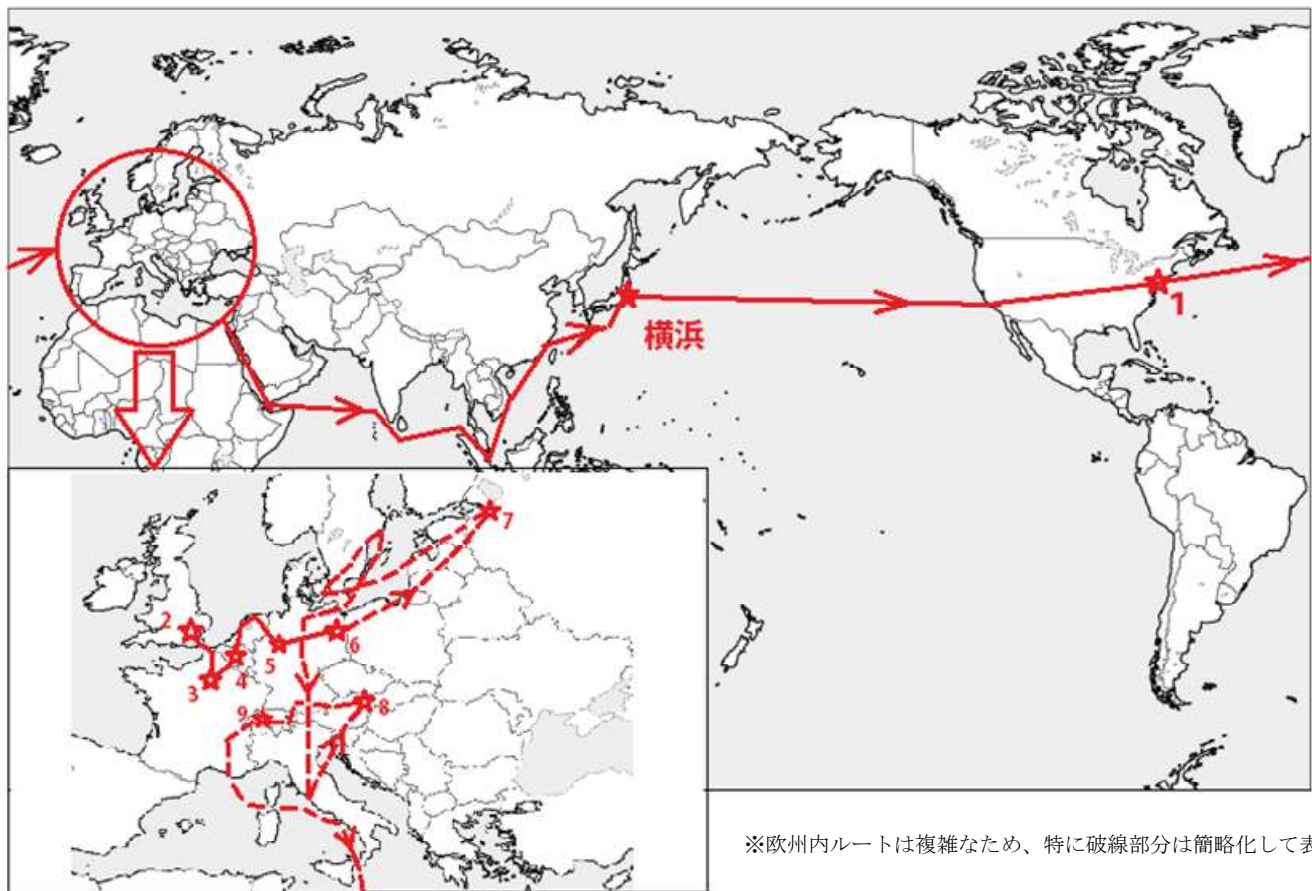
使節団	46 名	} 計 107 名
首脳随従者	18 名	
同行留学生	43 名	

岩倉使節団主要構成メンバーと帰国後の主な役職

主要団員名	使節団での役職	数え年	出身	政府内役職	帰国後の主な役職
イワクラ トモミ 岩倉具視	特命全権大使	47	公家	右大臣	右大臣
キド タカヨシ 木戸孝允	副使	39	長州	参議	文部卿・内閣顧問
オオクボ トシミチ 大久保利通	副使	42	薩摩	大蔵卿	内務卿
イトウ ヒロブミ 伊藤博文	副使	31	長州	工部大輔	内閣総理大臣
ヤマグチ ナオヨシ(マスカ) 山口尚芳	副使	33	佐賀	外務少輔	貴族院議員
タナベ タイチ 田辺太一	一等書記官	41	幕臣	外務少丞	貴族院議員
フクチ ゲンイチロウ 福地源一郎	一等書記官	31	幕臣	大蔵省出仕	衆議院議員
ガ ノリユキ 何礼之	一等書記官	32	肥前	外務省六等出仕	貴族院議員
ハヤシ タダス 林董	二等書記官	22	佐倉	外務省七等出仕	外務大臣
ナガノ ケイジロウ 長野桂次郎	二等書記官	29	幕臣	外務省七等出仕	開拓使御用掛
カワジ カンドウ 川路寛堂	三等書記官	28	幕臣	外務省七等出仕	外国文書課長
ウツミ タダカツ 内海忠勝	大使随行	29	長州	神奈川県大参事	内務大臣
クメ クニタケ 久米邦武	大使随行	33	佐賀	権少外史	帝国大学教授
ササキ タカユキ 佐々木高行	理事官	42	土佐	司法大輔	工部卿
タナカ フジマロ 田中不二麿	理事官	27	尾張	文部大丞	文部大輔
ヒダ タメヨシ 肥田為良	理事官	42	伊豆	造船頭	工部省

* 太字ゴシック体は海外使節・留学経験者

5. 岩倉使節団ルートと主な訪問地



地図番号	主要訪問地	訪問日(西暦)	謁見・会見相手	備考
-	横浜出港	1871年12月23日	-	明治4年11月12日(旧暦)
①	ワシントン	1872年3月4日	グラント大統領	1872年7月22日に条約改正予備交渉中止
②	ロンドン	1872年12月5日	ヴィクトリア女王	イギリス内各地を視察
③	パリ	1872年12月26日	ティエール大統領	前年発生のパリコミュンによる破壊跡残る
④	ブリュッセル	1872年2月18日	ハリオボルト2世	欧州最小国も、人民の繁庶なること世界一
⑤	エッセン	1873年3月7～8日	クルップ社	武器製造工場見学
⑥	ベルリン	1873年3月11日	ヴィルヘルム1世	3月15日招宴でのビスマルク演説に感銘
⑦	サンクト ペテルブルク	1873年4月3日	アレクサンドル2世	期待はずれの国状
⑧	ウィーン	1873年6月3日	フランツ・ヨゼフ1世	ウィーン万博見学(日本からの出展あり)
⑨	ベルン	1873年6月21日	セレスール大統領	時計工場など見学
-	横浜帰港	1873年9月13日	-	使節団本体。明治6年9月13日(新暦)

使節団訪問期間 計631日(= 1年8ヶ月23日 = 約 1年9ヶ月)

全訪問国リスト(米欧12カ国)

アメリカ・イギリス・フランス・ベルギー・オランダ・ドイツ・ロシア・
デンマーク・スウェーデン・イタリア・オーストリア・スイス

主な途中寄港地

ポートサイド・スエズ運河・アデン・セイロン島・シンガポール・サイゴン・香港・上海

旧暦・新暦対照表

明治5年12月2日 = 1872年12月31日

明治5年12月3日をもって

明治6年1月1日とする=1873年1月1日

6. 使節団誕生秘話

明治2年、フルベッキは大隈重信に欧米遣外使節進言の建白書を提出したが、政府としては廃藩置県が優先課題であった。明治4年7月にその廃藩置県が実現したことから、大隈重信は上記建白書をベースに大隈使節団構想を立てた。これに対し、岩倉は大久保とともにこの構想を岩倉使節団として実現させた。このため、大隈は「うるさい鬼の留守に多くの改革が断行出来る良い機会」と捉え、多くの実力者を岩倉使節団に加えて海外に派遣し、逆にこれをうまく利用しようとした。いずれにせよフルベッキの助言によって、この使節団が誕生したことは明らかだ。



フルベッキ顔写真
【明治学院歴史資料館所蔵】

フルベッキが幕末に長崎で教えていた頃の教え子の多くが明治政府の首脳陣となって活躍した。
東京の青山墓地に眠り、死後も日本の行方を見守っていることでしょう。



フルベッキが明治政府から1877（明治10）年に授与された勲三等旭日章の勳記と勲章
【フルベッキ4世所蔵（「勳記・勲章とも」）】

7. 留守政府との『約定』 12カ条

出発直前の明治4年10月27日（1871年12月9日）、留守政府（太政大臣：三条実美、参議：西郷隆盛・板垣退助・大隈重信）との間の微妙な思惑の違いを考え、両者は『約定』12カ条に調印した。その主な項目は以下の通りである。

- ◎ 重要な案件については報告し合い、月2回の交信を守る。
- ◎ 「内地の事務」は帰国後に大改正を予定しているので、その間はなるべく新規の改正はしない。
- ◎ 廃藩置県の処置は内地政務の基なので、順次実効を上げて改正の立脚地とする。
- ◎ 各省庁長官の欠員は参議が分担して増員は行わない。また官員の増員、現在雇い入れている外国人の増員も行わない。

以上の約定が交わされたが、事実上約定は遵守されずこれが後の『明治6年の政変』の伏線となった。岩倉使節団不在の1年9か月の間に留守政府が行った主な改革は次の通りである。

『四民平等』	『地租改正』	『徴兵令』
『学制』	『太陽暦の採用』	等

8. 欧米の実態・長所・短所を学ぶ

岩倉使節団は欧米各国を訪問し、各国の実態・長所・短所を直接自分の目で観察し、学んで来た。

久米邦武著『米欧回覧実記』による実態・長所・短所のまとめ

国	実 態	長 所	短 所
アメリカ	・ 広い領土 ・ 活気ある国家・国民 ・ 無身分制度 ・ 4年毎の大統領選	・ 努力次第で立身出世可能 ・ 充満した敬神精神 ・ 無門閥	・ 過剰なレディーファースト ・ 日本に不向きな共和制 ・ 多数決（常に正しいか？）
イギリス	・ 商工業による強い社会基盤 ・ 工業・加工貿易で実利 ・ 足早で律義な国民	・ 老獪で強い政治力 ・ 海軍力が素晴らしい ・ 産業立国として学ぶ点多し	・ 強すぎる議会 ・ 激しい貧富の差 ・ 煤煙で汚れた空気
フランス	・ 豊かな農業国 ・ 高いプライドで独自文化 ・ 激しい政治の変化	・ ゆったりとした国民性 ・ 開花した文化・文明	・ 文化面で一部頹廃 ・ 強い革命の歴史 ・ 交替多い政治家トップ
ドイツ	・ 普仏戦争勝利で国威高揚 ・ ビスマルクの台頭 ・ 立憲君主制	・ 質素で勤勉な国民性 ・ 高い科学技術力 ・ 多い日本との共通性	・ 難関の言語
ロシア	・ 国土は広大だが未開 ・ 唯一強大な軍備力	・ 特に無し	・ 貧しい一般国民の生活 ・ 強力な軍勢力による恐怖感

9. ビスマルクの助言

ドイツ帝国宰相オットー・ビスマルクは1873年3月15日に岩倉使節団を夕食会に招き、その席上スピーチを行い、日本の歴史上にも大きな影響を与えるものとなる。その要旨は、



オットー・フォン・ビスマルク

(1815年 - 1898年)

(ドイツ連邦公文書館ご提供)

- (1) 各国は親睦と礼儀をもって交際しているが、裏面では相互不信が本音である。
- (2) 大国は利益ある限り万国公法（国際法）を遵守するが、不利になれば軍事力を身勝手に行使するものである。
- (3) 英仏の両国は植民地を搾取している現状から、平和外交など信用できない。
- (4) 日本とドイツの置かれた立場が似ているので、国権と自主を重んずるドイツが最も親しむべき国なのである。

このビスマルクの演説は使節団の幹部、特に木戸孝允、大久保利通、伊藤博文等に衝撃的な印象を与えた。そしてそれ以後の明治日本の外交政策や内政政策に大きな影響を与えることとなった。特に大久保はビスマルク政治を範として、強力な政府による政治を実践、富国強兵、殖産興業を推進していった。

10. 使節団がドイツで見たもの

ドイツ最初の訪問はエッセン市にある鉄鋼会社クルップ社で最新鋭の大砲を見ることであった。そこでは3月7日・8日の二日間にわたり大変な興味と興奮をもって熱心に設備を見学することになった。



クルップ社訪問を報じる現地風刺新聞

『スズメバチ画報ユーモア週刊誌』より

“職務に忠実な日本人はヨーロッパの文明を知るためにこのようにして学んでいる”

(ペーター・パンツァー ポン大学名誉教授ご提供)

その後、ベルリンに移動し 1873 年 3 月 9 日から 28 日まで 19 日間滞在した。ドイツでの見学は製造場・博物館・官署・兵営・大学・宮殿など多岐に亘っていた。フランクフルトでは紙幣印刷場ドンドルフ・ナウマン社を見学した。明治政府は新紙幣印刷を当初イギリスに発注する予定であったが、偽造防止技術に優れているということで 1870 年 10 月に同社へ発注された。ドイツから届き始めた紙幣は安全対策のため未完成とし、紙幣名「明治通宝」や「大蔵卿」の印官印などを日本で補って完成させた。その後、技術移転され日本製のものに置き換わっていった。

1 1. 日本の望ましい姿とは

岩倉使節団は、1871年12月23日（旧暦・明治4年11月12日）～1873年9月13日（新暦・明治6年9月13日）までの1年9か月間弱（631日間）の欧米諸国の視察から、日本の望ましい姿として、次のように描いたと思われる。

- 1 天皇を中心とした立憲君主制
- 2 倫理観を持った専制官僚主義
- 3 欧米諸国の植民地にならない国内体制
- 4 産業を興し、貿易を活発化させて目指す豊かな国
- 5 他国からの侵略に対応出来る強力な軍事力
- 6 欧米各国と対等に付き合う為に必要な文明開化

◎ 岩倉使節団の総意

使節団は帰国途中、東南アジアの各国に立ち寄り、欧米の植民地政策の過酷な実態を見聞して来た。日本はこのように姿にならないように、日本国発展のためには、“ドイツ流システムの導入が一番望ましい”との流れにつながったと思われる。

1 2 . 明治 6 年の政変（岩倉使節団帰国後）

明治 6（1873）年 10 月、西郷朝鮮使節団派遣が延期され、9 参議のうち 5 参議が一斉に辞職した。正に明治政府首脳が真っ二つに分裂した近代日本政治史上の事件である。

西郷朝鮮使節派遣は 8 月 17 日に内定していたが、9 月 13 日の岩倉使節団帰国後、正式決定することになっていた。三条実美は、国内問題優先で使節派遣延期を岩倉具視・大久保利通と密約し閣議開催。

10 月 14 日、大久保が使節派遣に反対し閣議は紛糾。翌 15 日には、三条・岩倉が豹変し使節派遣に賛成して、大久保以外の全参議の合意で朝鮮使節派遣を正式決定。17 日、三条と岩倉の豹変に激怒した大久保は直ちに辞表提出。岩倉も責任を感じて辞意表明。木戸孝允も辞表提出。その夜、三条は岩倉に協力を要請したが拒否され、高熱を出し人事不省に陥った。

20 日、天皇は岩倉に太政大臣代理の勅命を下した。23 日、岩倉は閣議の内容とともに岩倉の私見を上奏。24 日、天皇は岩倉の私見を裁可。そのため 25 日、西郷隆盛・板垣退助・江藤新平・後藤象二郎・副島種臣の 5 参議が一斉に辞職した。この政変の結果、明治政府は大久保利通・大隈重信・伊藤博文らが実権を握った。

1 3 . 明治 14 年の政変

明治 14(1881)年 10 月、急進的な憲法制定と国会開設を求める大隈重信のイギリス流憲法意見書と、伊藤博文を中心とする薩長系参議の漸進的憲法意見書とが対立し、大隈一派を政界から追放し、高まる自由民権運動を弾圧した事件である。

10 年計画で進行した北海道開拓事業が明治 15 年で終わるにあたり、政府は北海道開拓使官有物を民間に安く払下げしようとした。それをきっかけに、8 月以降、民権派の政府批判は実質的には薩長藩閥に対する批判となってさらに激しさを加えるに至った。それに対し、岩倉・伊藤らは肥前出身の大隈が民権派を煽っていると考えた。

岩倉と伊藤らは、大隈のイギリス流ではなくドイツ流憲法で行くことを確認し、明治 14 (1881) 年 10 月 11 日の御前会議で大隈追放を決め、翌 12 日に下記の勅諭がくだされた。

(1) 大隈重信一派追放

(2) 開拓使官有物払下げ中止

(3) 国会開設勅諭

① 明治 23(1890) 年に国会開設

② 君主の意思で制定される「欽定憲法」策定

③ 欽定憲法作業妨害者の断固処罰

14. お雇い外国人

幕末から明治にかけて、欧米の先進技術や制度・学問を導入するために雇われたお雇い外国人は、英・米・仏・独・蘭で全体の9割を超えていた。しかも彼らには高給取りが多く、国家予算を圧迫し続けたため、日本側は早く日本人だけで運用したいと考え、留学生の海外派遣を促進させることになった。

主なお雇い外国人 — 専門分野と給与水準

分野	ドイツ	フランス	イギリス	アメリカ
医学	ベルツ(草津温泉など) スクリバ(外科医)			
法学	ロessler(明治憲法)	デュ・ブスケ(兵式顧問) ポアソナード(国際法顧問)		フルベッキ (岩倉使節団生みの親)
建築	グレーフェン (官営新町紡績所設計)	ヴェルニー(横須賀造兵廠) バスティアン(横須賀製鉄所・富岡製糸場設計)	コンドル(辰野金吾などを育成。鹿鳴館建設)	
音楽	エツェルト(君が代編曲)			
鉄道	ルムシュッテル(日本の 鉄道へのメートル法導入) バルツァー (東京の鉄道網大構想)		モレル(新橋-横浜間鉄道) ページ(同上の運行ダイヤ 作成)	
教育	ハウスクネヒト(教育学) リース(歴史)			クラーク(札幌農学校)
その他	ナウマン(ナウマン象、 フォッサ・マグナ) ワグネル(窯業) ケルネル(農業)	ブリュナ(富岡製糸場)	ミルン(日本地震会創設) キンドル(造幣寮首長)	モース(動物学、大森貝塚) ヘボン(ヘボン式ローマ字) フェノロサ(美術)

給与待遇(月給。明治2年から明治10年代前半にかけて雇われた外国人の例)

	人名	国籍	役職	月給(円)
お雇い外国人	キンドル	イギリス	造幣寮首長	1,045
	モレル	イギリス	工部省鉄道寮建築師長	800
	フルベッキ	アメリカ(蘭系)	大学南校教頭	600
	ロessler	ドイツ	外務省顧問	600
	モース	アメリカ	東京大学教師	350
	フェノロサ	アメリカ	東京大学教師	300
参考	三条実美	日本	太政大臣	800
	岩倉具視	日本	右大臣	600
	大久保利通	日本	参議	500

* 一般的な日本人職工の平均月給は約6~7円程度であった。

1 5 . 明治初期 海外留学生の推移

草創期〔明治元年～7年〕

1. 明治初頭の教育, 兵制, 殖産業等の制度、ノウハウの導入は、イギリスやフランスから多く学び、実質的には“お雇い外国人”に頼る面が多かった。
2. 一方留学生の派遣は、各省はバラバラで基準がなく、その選考は公家、雄藩等、有力者の推薦等で留学するものが多かった。

3. 明治初期の留学生、年度別、留学先別一覧表

明治	西暦	計	独	英	米	仏	墺	その他
元年	1868年	13	1	6	2	3	0	1
2年	1869年	12	3	3	4	0	0	2
3年	1870年	182	31	53	66	24	0	8
4年	1871年	225	30	71	86	17	0	21
5年	1872年	91	7	18	46	15	1	4
6年	1873年	22	5	10	2	0	4	1
7年	1874年	10	1	3	6	0	0	0
時期不明		31	3	9	11	1	0	7
計		586	81	173	223	60	5	44

出典：石附 実著 『近代日本の海外留学史』（中央文庫）

4. アメリカとイギリスが多い。特にアメリカは日本人留学生の受け入れを歓迎した。
5. 明治5年、官費留学生が330名、出費も41万4千円の巨費となった。
6. そのため留学生に関し、明治政府は文部省を中心に“一業一科”と“国家実務に貢献”を考慮した派遣新基準を設定した。
・・・留学先にての学科変更不可・・・
7. 明治6（1873）年12月、全留学生に帰国命令を発令。

16. 海外留学生国別推移一覧表

5年間毎のまとめ（文部省派遣）
明治8（1875）年～昭和15（1940）年の66年間

和暦	西暦	実 人数	独	英	米	仏	墺	スイス	伊	他	延 人数
明治8～12	1875～1879	28	6	11	9	6	1	0	0	1	34
明治13～17	1880～1884	28	24	6	3	2	4	0	0	1	40
明治18～22	1885～1889	24	11	10	5	1	2	1	0	1	31
明治23～27	1890～1894	27	22	5	2	9	1	0	1	2	42
明治28～32	1895～1899	128	109	29	19	34	16	2	5	10	224
明治33～37	1900～1904	177	147	69	39	52	8	3	5	14	337
明治38～42	1905～1909	181	161	102	89	63	5	3	8	11	442
明治43～大正3	1910～1914	175	152	98	91	47	9	4	9	6	416
大正4～8	1915～1919	268	39	172	249	112	1	97	19	21	710
大正9～13	1920～1924	727	596	572	621	380	31	117	87	71	2,475
大正14～昭和4	1925～1929	781	628	272	675	144	44	32	196	91	2,082
昭和5～9	1930～1934	353	273	95	265	52	8	15	132	57	897
昭和10～14	1935～1939	271	211	33	177	49	1	11	59	36	577
計		3,168	2,379	1,474	2,244	951	131	285	521	322	8,307

出典：辻直人著『近代日本海外留学目的変容』東信堂

註：

1. 複数国への留学者がいるため、人数と延人数とは一致しない。
2. 派遣開始の5年間は英・米が多い。その後は、独が圧倒的に増大し多大の影響を受けた。
3. 大正4年からの5年間にドイツが減っているのは、第一次世界大戦の影響である。
4. 複数国留学する場合も、ドイツを最初の留学先にするものは一時期を除き常に6割と高い。

17. 日独医学交流のあゆみ（1）

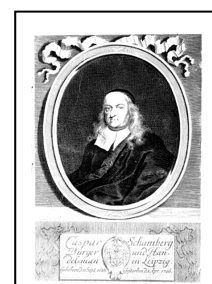
・・・ 参考文献 日本国際医学協会編『黎明期の日本近代医学・薬学』 ・・・

江戸時代

オランダ東インド会社は多くの医師を必要とした。欧州採用のドイツ人医師が、表面上はオランダ人として日本などに多数赴任した。そのうち日本に多くの影響を与えたドイツ人医師3名を紹介したい。

カスパー・シャンベルゲル（1623～1706）

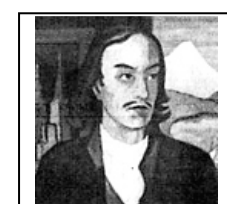
4代将軍家綱時代の慶安2（1649）年に来日。紅毛流外科を伝授した。以降、カスパー流外科と呼ばれた。



シャンベルゲル肖像画

エンゲルベルト・ケンペル（1651～1716）

元禄3（1690）年から約2年間、日本に滞在し5代将軍綱吉にも謁見。日本の地理・動植物・政治・宗教等の研究と調査を行った。帰国後の『廻国奇観』と『今日の日本』は欧州での日本紹介版となった。



ケンペル肖像画

フィリップ・フランツ・フォン・シーボルト（1796～1866）

文政6（1823）年から約5年間、日本に滞在し長崎で塾を開いた。帰国後全7巻の『日本』等を出版し日本学の祖として名声高まる。歴史上シーボルト事件でもよく知られている。



シーボルト肖像画

佐賀県立美術館蔵

幕末期から明治初め

薩長が英国人医師ウィリアム・ウィリスに医師の援助を依頼したことから、薩長土はイギリス派となった。しかし、肥前鍋島藩の相良知安（1836～1906）は、江戸時代の名医がすべてドイツ人であることから、“日本はドイツ医学を学ぶべき”と推奨した。

18. 日独医学交流のあゆみ（2）

明治期のドイツ人医師

ベンジャミン・ミュルレル（ミュラー）（1824～1893）

明治 4（1871）年に軍医少佐として来日。おもに外科・産婦人科・眼科を指導するとともに、医師の育成教育システムを確立。

テオドール・ホフマン（1837～1894）

明治 4（1871）年に軍医大尉として来日。おもに内科学・病理学・薬理学を担当。物理・化学・数学等、医学以前の基礎学問の重要性を当時の学問所（東校）で力説した。

ベルツ（内科）とスクリバ（外科）時代

この二人の指導により、日本人医師が続々と誕生し、近代医学・医療の発展とともに、医療システムの全国化が可能になった。



草津温泉にある
ベルツとスクリバの像

ベルツとスクリバの略歴

	ベルツ	スクリバ
生年	1849年1月13日	1848年6月5日
生地	ビーティッヒハイム・ビッシンゲン （シュトゥットガルト近郊）	ラインハイム （ダルムシュタット近郊）
来日時期	明治9（1876）年 27歳	明治14（1881）年 33歳
結婚・家庭	荒井ハナと結婚 一男一女	神谷ヤスと結婚 二男二女
東大退官後	宮内省侍医	聖路加病院外科主任
帰国	明治38（1905）年（夫妻で）	帰国せず
死去	大正2（1913）年64歳 シュトゥットガルトにて	明治37（1905）年57歳 東京にて
墓	シュトゥットガルト	東京青山墓地（子孫と共に）

19. 岩倉使節団での新島襄の役割

新島襄（天保 14（1843）年～明治 23（1890）年）は群馬県の誇る偉人の一人として『上毛かるた』に描かれている。文久 4（1864）年密出国してアメリカに渡り、



『上毛かるた』で詠まれている新島襄

（群馬文化協会ご提供）

アンドーヴァー神学校で洗礼を受け、アマースト大学で研究に励んだ。

明治 5（1872）年にアメリカ訪問中の岩倉使節団と出会う。新島の仕事は田中不二麿文部理事官の通訳とアメリカ教育制度の報告が主なものであった。二人は 5 月にアメリカからイギリス、フランスを經由しドイツ・ベルリンに到着。新島は欧米各国の教育制度を紹介する報告書として『理事功程』の草稿をベルリン滞在中にまとめ、文部理事官随行を辞す。文部省は明治 6 年から 8 年にわたって、これを全 15 巻として出版した。

新島はこの米欧教育制度調査により最新の知識を得て、キリスト教の道徳に基づく自治精神旺盛な私立大学の設立を決意し、明治 8（1875）年に『同志社英学校』（後の同志社大学）を開校する。

参考文献・資料類

- | | | |
|------------------------------|-----------|-------------------|
| 『特命全権大使米欧回覧実記』普及版 | 水澤周訳・注 | 慶應義塾大学出版会 |
| 『岩倉使節団 米欧回覧実記』 | 田中彰 | 岩波書店 |
| 『岩倉使節団の再発見』 | 米欧回覧の会 | 思文閣出版 |
| 『岩倉使節団 遠い崖 ― アーネスト・サトウ日記抄9』 | 萩原延壽 | 朝日新聞社 |
| 『欧米から見た岩倉使節団』 | I.ニッシュ編 | ミネルヴァ書房 |
| 『明治維新と西洋文明』 | 田中彰 | 岩波新書 |
| 『明治維新と天皇制』 | 田中彰 | 吉川弘文館 |
| 『維新政権』 | 松尾正人 | 吉川弘文館 |
| 『NHK スペシャル 明治2』 | | NHK 出版 |
| 『お雇い外国人 ①概説』 | 梅溪昇 | 鹿島研究出版会 |
| 『お雇い外国人 ①政治・法制』 | 梅溪昇 | 鹿島研究出版会 |
| 『お雇い外国人 明治日本の脇役たち』 | 梅溪昇 | 講談社学術文庫 |
| 『お雇い外国人とその弟子たち』 | 片野勤 | 新人物往来者 |
| 『明治前期お雇い外国人の給与』 | 植村正治 | 流通科学大学論集 21 巻 1 号 |
| 『ケンペルの見たトクガワ・ジャパン』 | J.クライナー | 六興出版 |
| 『ケンペルのみた日本』 | J.クライナー | 日本放送出版協会 |
| 『レンズが撮らえた幕末の日本』 | 岩下哲典・塚越俊志 | 山川出版社 |
| 『外国人が見た近世日本』 | | 角川学芸出版 |
| 『西洋の発見 ― 幕末・維新期の遣外使節と留学生達 ―』 | | 名古屋大学附属図書館 |
| 『近代日本の海外留学史』 | 石附実 | ミネルヴァ書房 |
| 『大久保利通と明治維新』 | 佐々木克 | 吉川弘文館 |
| 『明治六年政変』 | 毛利寿彦 | 中公新書 |
| 『誇り高き日本人』 | 泉三郎 | PHP 研究所 |
| 『史伝 伊藤博文』 | 三好徹 | 徳間書店 |
| 『幕末・明治 陰の主役たち』 | 三好徹 | NHK出版 |
| 『大君の使節』 | 芳賀徹 | 中公新書 |
| 『わが人生』 | 新島襄 | 日本図書センター |
| 『新島襄』 | 渡辺実 | 吉川弘文館 |
| 『海を渡った幕末明治の上州人』 | 萩原進 他 | みやま文庫 |

なお、パネル作成にあたっては久米美術館のご好意でいろいろな情報・資料そして適切なアドバイスを頂きました。この場をお借りして御礼申し上げます。